

## 引退後のプロ野球選手にみる自己物語 —— プロ野球選手役割に執着しないための語り

篠田潤子 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程  
Junko Shinoda Graduate School of Sociology, Keio University

### 要約

本論文は引退後の進路が白紙であった2人の元プロ野球選手の語りから、どのように彼らが引退を語るのか、その類型を明らかにした。面接で得た彼らの語りは、引退から5年間が経過した元選手の自己物語である。分析の結果、①プロ野球選手になるまでが克明に語られ、現役時代については、ほとんど語られなかった。②「プロ野球選手になりたいわけではなかったが、他者の決断に依存して、なってしまった」と語られた。③「今振り返ると、過去に起きたこと、思ったことはすべてよかった」と繰り返し語られた。これらの点から、彼らの自己物語は、プロ野球選手という役割への執着 (Role Residual: Ebaugh, 1988) を断ち切るための語りであることが明らかになった。

### キーワード

引退, 自己物語, 役割離脱, 社会的死

### Title

**Self-narratives of ex-professional baseball players: for the goal of relieving the "role residual" of professional baseball player.**

### Abstract

This paper determined the typology of the self-narratives of two professional baseball players' stories of retirement, told five years after they had retired as active players. They had no careers to pursue at the time of their retirement. The findings were as follows: They said little about their time as professional baseball players; they both stated: "I didn't want to become a professional baseball player, but somehow I became one" and "When I look back, I think that every single thing that happened or every feeling that I had was for my own good." These findings suggest that the stories they told can be understood as an act in the goal of relieving their "residual role" (Ebaugh, 1988) as professional baseball players.

### Key words

retirement, self-narratives, role-exit, social death

## はじめに

毎年12月末に各プロ野球球団から退団者のリストがマスコミに発表される。発表に至る前に選手が戦力外通告をうける時期というのは、様々であり、シーズンを終えた10月ごろ告げられる人もいれば、秋季キャンプで突然告げられる人もいるなど、一概には言えない。その後、戦力外通告を受けた人は、12月末までに引退後の進路を球団に届け出なければならない。

1991年から2000年までの10年間で引退した792人のうち、引退直後にコーチになることができたのは98人(12%)、解説者などの職を得られた人は58人(7%)にすぎなかった。他方で、野球とは無縁の職業に就かざるを得なかった人は430人(54%)にも上った。このうち261人(33%)は戦力外通告を言い渡された後、途方にくれて12月の新聞発表では進路の欄が白紙のままだった(篠田, 2004)。

とりあえず対外的な答えとして、430人中44人は「韓国あるいは台湾野球に挑戦しようかと考えている」と申告しており<sup>1)</sup>、169人は「確約はとれていないが知人の紹介で異業種につく予定」と申告している。それすら言えず、261人は進路欄が白紙だったのだ。彼らは「クビ」を言い渡された現実を受け入れ、次に進む余裕を持てなかったのではないかと推察される。ハリス&エイツェン(Harris & Eitzen, 1978)によれば、スポーツ選手にとっての引退は、「満足できない能力」と、「それゆえ失脚者だと評価される」ことを同時に受け入れることである。引退は、喪失体験なのである。

スポーツ選手(プロ、アマチュア)の引退の過程を研究した先行研究は1980年には20しかなかったが、1998年には200を数えるまでになった(Lavallee et al., 1998)。これら先行研究の理論的立場はドラホタ&エイツェン(Drahota & Eitzen, 1998)によれば、次の5つに分類される。①社会的ストレスとしての引退(Social stress research)、②老人学:高齡化と引退(Gerontological Theory: retirement and aging)、③死生学:社会的死としての引退(Thanatology: retirement as death)、④ライフコース論における人生移行の一つと

しての引退(Transition and Life Course Theories: retirement as normal)、⑤役割離脱理論(Role Exit Theory)の5つである。

これら先行研究の目的は、大きく三つに分かれる。すなわち、(1)引退そのものの経緯を理解しようとする研究と、(2)引退にともなうストレスをはじめとした問題解決に焦点をあてる研究、そして、(3)双方に言及した研究である。

①の引退を性差、人種、ソーシャルクラスの問題と同じように、社会的ストレスとして論じる研究では、ストレス軽減モデルを提唱する(Swain, 1991)など、(2)の問題解決に焦点をあてている論文が多い。

一方、②③④⑤は(1)の引退そのものの経緯を理解しようとする研究における主な理論的立場の違いである。いずれの理論も「役割」の概念を用いて論じられている。そこで、まずは「役割」の定義を明らかにしてから、それぞれの理論とその問題点をまとめる必要がある。

ジョージ(George, 1993)によれば、役割という概念はリントン(Linton, 1936)によって初めて言及された。その際リントンは、社会的地位(status)に見合った振る舞いを「役割(role)」と定義した。やがて「役割」の概念はそれだけにとどまらず、社会的地位そのものも意味するように拡大された。社会規範が個人やサブグループに「役割」を与え、さらには「役割」の種別と付与する時期、剥奪する時期をも、社会規範が決定することとされたのである。社会規範に添うことで社会的に受け入れられ、失敗すると社会的な制裁をうけることになる。これが役割理論(role theory)である。やがてこの役割概念は、ライフコース論に取り入れられ、人生移行(transition)は、役割参入と役割離脱として捉えられるようになったのである。

②の老人学はライフコース論における老年期の研究である。「高齡を迎え、職から離れるということは、社会的な役割を失う過程」として、退職、隠居を、役割喪失という役割概念で説明する。役割喪失によりそれまでの所属集団との関係が変化し、それに対応して自己概念を変化させることができないため、老人は不適応に陥るという考え方である。

しかし、カーティス&エニス(Curtis & Ennis,

1988)は「老人学をエリートスポーツ選手の役割離脱に当てはめるのは、一見便利なようではあるが、しかしながら一部分でしかフィットしていない。むしろ言い当てていない部分の方が多いようにも思える。この理論は最終的な職業からの離脱に最適な理論である」と批判した。またマーフィー (Murphy, 1995) も、スポーツ選手の引退を簡単に定年退職に重ねて論じていることについて、「年代的に人生の早い時期に引退しなければならないことを考えると、一般の職業の定年退職と比較するのは難しい」と批判している。

③死生学では、「元選手は生きてはいるが、社会的に孤立している状態がまさに“社会的死 (social death)”」であると主張する。引退でなくとも、コンディションの悪化や主戦力から脱落しただけでも、「死に相当するような孤独である」と見る向きもある (Rosenberg, 1982)。さらにカール (Kearl, 1986) は、“death”という用語を役割の終わりのメタファーとして使用し、(イ)「良い死に方」と(ロ)「悪い死に方」があるとした。「悪い死に方」とは、選手生命のピークを過ぎたあとも、そのキャリアにしがみつような終わり方であると主張した。しかしこの理論に対しては、「引退はもはや死と同じである」という言い方は、運動選手がストレスに押しつぶされたという側面を強調しすぎているというローゼンバーグ (Rosenberg) による批判がある (Ogilvie & Taylor, 1993)。また、引退した時点で元選手はまだ若く、死を迎えるのではなく、むしろセカンドキャリアを始めなくてはならない状況に置かれており、これからも人生が存続する点で、死生学から論じることは難しいとも指摘されている。

④ライフコース論では、引退を人生におけるイベントの一つであると考え、概して「たいしたことではない」としている。グリーンドーファー&ブラインド (Greendorfer & Blinde, 1985) は、引退を (a) 終点よりも継続期に焦点をあて、(b) 移行もイベントというよりはプロセスとみなしており、(c) 引退を完全な断ち切りというよりは、卒業的シフトや興味対象の順位の入れ替えとみなし、(d) シビアではなくマイルドな適応の問題だとしている。

⑤役割離脱理論 (Role Exit Theory) では、引退を役割離脱 (role-exit) として捉える。仕事を通してある

役割行動に没頭していた (commit, involve, engulf) にもかかわらず、役割離脱によりその主要役割 (master role) を失った人が、新しい役割 (role) のもとの、どのように新たなアイデンティティを構築するのか、その過程に着目する理論である。エボー (Ebaugh, 1988) によれば、「これまでは役割理論と言えば、役割参入の研究が専らで、役割離脱はあまり研究の対象とされなかった」という。自らが修道女という役割からの離脱者であるエボーは、15人の元修道女の面接調査を皮切りに、その後、家族役割 (夫、妻、親権のない母親)、職業役割 (修道女、医者、警官、教員、航空交通管制官、軍人)、さらには性転換や、依存症からの立ち直りも役割離脱とみなし、独自の理論を展開したのである。そして、役割離脱 (引退) した後、いつまでも前の職業役割に対しての「執着 (role residual)」が、新しいアイデンティティを構築する障害となっていることを指摘した。なかでも特に、プロフェッショナルな職業からの離脱では、より強い「執着」がみられたのである。

以上の理論のうち、本論文は①のストレス軽減法を提唱することが目的ではない。引退の経緯を理解することが目的であり、引退経験がどのように意味づけられ、どのような物語構造で語られるのかを分析するものである。また、引退後も長い人生を生き延びなければならないことを考えれば、プロ野球選手の引退を、②老人学や③死生学の立場から論ずることに無理があると考えられる。④ライフコース論で論じられる「単なるライフイベントのひとつにすぎない経験」とは言えない。プロ野球選手は幼少期から、野球が生活の中心にあったため、その引退は、単に収入の道が絶たれるだけでなく、本人のアイデンティティを構築する主要役割からの離脱と考えられるからである。従って、⑤役割離脱の立場から、本論文は論じられる。

役割離脱理論では、プロフェッショナルな職業からの離脱が困難を伴うことが指摘されているが、本論文の面接対象者の、AさんとBさんは、まさに、プロフェッショナルな職業、プロ野球選手である。幼少期から野球に没頭して、ついに頂点に立ったにもかかわらず、プロ野球選手役割から離脱しなければいけなかった。彼らの役割離脱は容易ではなく、強く執着心を抱いたと考えられる。特に、彼らは自ら引退を決めた

わけではなく、引退後の進路欄が白紙であった元選手である。

役割離脱には、自らの意志による (voluntary) 離脱と自らの意志によらない (involuntary) 離脱がある。エボ一の研究対象者は主に自らの意志による役割離脱者であった。しかし、A さん、B さんの場合は自らの意志によらない役割離脱を強いられた人である。より強い執着心が語られると考えられる。引退という喪失体験から5年が経過した彼らはどのように自己物語を語るのだろうか。本来幾通りにも語れるはずの物語である。どのような共通の特徴をもった自己物語が語られるのかを分析することで、新しいアイデンティティを構築しなければならない元プロ野球選手の語りの類型 (typology) を見出す。

しかし、引退の主観的意味を分析したい本論文の目的には合致する方法であると思われる。その語りの中身が客観的事実であるかどうかは、もとより問われる点ではなく、ナラティブが、その中に主観的かつ社会的な構築を含んでいる (Bruner, 1987) という考え方に立つものである。

このナラティブ・インタビューは、「研究のため、あなたの引退についての経験を知りたい」とだけ告げて始まった。非指示で自由に語ってもらうため、こちらから新しい質問を投げかけることはできるだけしないよう、また、相槌 (主にうなずき) は、否定・肯定の評価をもたないよう心がけた。「無知の姿勢」(野口, 2002) を全うするため、敢えて事前に現役時代の成績や、在籍球団など経歴を調べていくことはしなかった。

### 面接対象・方法

面接調査は、引退した選手 12 人に対して行った。そのなかで、本論文では、引退と同時に失業という喪失体験をし、かつ進路の欄が白紙であった 2 人 (A さん、B さん) を分析する。2 人の最終年俸とプロ在籍年数と引退年齢は表 1 に示した。

面接当時 A さんは 33 歳、B さんは面接当時 38 歳。ともに引退後 5 年経っていた。

A さんとは、10 年ほど前に数回顔を合わせた経験があった。そこで、共通の知人を頼り、A さんが、現在仕事をしているアメリカから日本に一時帰国している間に時間をつくってもらった。B さんとは、初対面だった。事前調査における面接対象者であった元プロ野球選手から紹介をうけ、面接に漕ぎ着けた相手であった。

ナラティブ・アプローチ (narrative approach) により面接は行われた。ナラティブ・アプローチの概念については議論のあるところであるが、ここでは「まったく指示のないままに語ってもらい、その語り (narrative) がデータとなるアプローチ法」を指す。「ナラティブ分析は事例研究に終始してしまい、特異性はみだせても、そこから一般化できる理論を見出すのはむずかしい」との批判を受けることがある。し

### 制約と混乱

本論文の面接における相互作用を明らかにするために、面接対象者との関わり (山本, 2004) と、「制約と混乱」(Flick, 1995/2002) についても言及する。まず、プロ野球選手はインタビューを受けるのも仕事のうちである。自分について、語ることは、かつて幾度も経験している点で特異な職業であることに注意しなければならない。しかも、取材では視聴者・世論を意識し、取材者の意図に配慮した発言をした経験が多いのである。例えば、生放送中のヒーローインタビューでは、

・「素晴らしいプレーでしたね」  
→「皆様の声援のおかげです」

・「今期はいいすべりだしですね」  
→「いや、これからもっと努力をしますだけです」

・「最後にファンの皆さんにひとこと」  
→「ありがとうございます。これからも応援よろしくおねがいします」

など、決まり文句をやり取りする。逆に、ロングインタビューなどでは、取材慣れしたプロ野球選手は

表1 Aさん、Bさんの引退年齢、最終年棒、プロ在籍年数

	引退年齢	最終年棒	プロ在籍年数
Aさん	28歳	1200万円	6年
Bさん	33歳	1400万円	9年
平均値	29.79歳	1757.76万円	9.75年

注) 平均値は1991-2000年に引退した792人のデータから算出

「意識的に」通常語られるプロットから外れた発言をする。「隠されていた真意が明かされた」と銘打って放送する企画意図を理解し、期待に応えるわけである。

筆者はかつてこのフィールドにおり、現役時代のAさんにインタビューをしたことがあった。当時はプロ野球をテレビ報道する立場にあり、まさにこのフィールドの当事者であった。この職業上の経験により、グレーザーのいう「理論的感受性 (theoretical sensitivity)」を得たことで、より深い考察が可能になる (Strauss & Corbin, 1990/1999)。また、同じフィールドからの職業役割離脱経験をもつことから、面接対象者のシンパシーを得られたようであった。

面接調査を開始すると元プロ野球選手のAさんは、“求められている答え方”がはっきりしないため、しばらくは、どのように語ったらよいか、「混乱」していたように思われた。また、AさんもBさんも実名で論文発表することを了承し、録音もみとめてくれたが、Aさんは、高校進学の実事情と、現在の仕事の説明、この2点の語りの途中において、「第三者に迷惑がかかるから」として、録音の中断を求めた。引退後もプロ野球選手にまわりつく有名性による「制約」がそこにはあった。従って、この2点については、録音を中断した。

### 分析方法

ナラティブ分析の目標は、理論産出を進めるうえで中間的段階として、ライフストーリー的経過のタイプロジー (類型論) を発展させることにある (Flick, 1995/2002)。本論文では引退後、進路が白紙であった

2人のテキストを比較し、語りの共通性から、プロ野球選手の引退の物語の語りの構造を見出すことを目指した。

物語には流れがあり、聞き手の理解を促すよう話し手によって構成されている。リースマン (Riessman, 1993) によれば、ナラティブはその構造を分析すべきだという。具体的にはどのように経験の流れが語られたのかを分析するのである。単に言語によって示された内容だけを見るのではなく、経験についての「語り方 (物語がどのように組織立てられたのか、言語学的及び、文化的な背景をさぐり、出来事がどのようなあらすじとして組み立てられ、そして何を意味するのか)」を分析する。話される順番、強調された点、除外されたことにも着目する。具体的手順は以下のとおり。

1. 彼らの語りを、中断を求められた箇所以外はすべて録音し、文書化して得たテキストをもとに、まずは全体の語りの流れをみる (シークエンス分析)。全体としてのかたち (ゲシュタルト) が見失われないために、リースマンのように全文をコード化することはせずに、物語性を重視して大きな区分による物語の構造をみる。
2. 語られた順番に着目する。
3. 区分内容を吟味する。
4. 話された量に着目する。
5. 語られなかったことに着目する。
6. 語りの種類に着目する。まずナラティブを手がかりに“現実”の成り立ちを理解する (野口, 2003)。客観的事実として語られた“現実”を年表の形でまとめて示す。そして、“現実”の記述以外の語り (種類) を分析する。

## 結果

1. Aさんは4時間近く、Bさんは2時間以上の時間をかけ、物語を語った。その語りを、中断を求められた箇所以外はすべて録音し、文書化してテキストを得た。

長時間にわたり語られた物語は、流れるように、つぎつぎと展開し、話し慣れている印象を受けた。聞き手が「引退について聞かせて欲しい」と切り出したにもかかわらず、「引退した自分」が第一の出来事としては語られなかった。Aさん、Bさんの物語はともに、時間的区分のもとに4つに分けて語られた。

2. 語られた順番に着目すると、AさんBさんともに、少年時代から現在までを時系列で語っていた。

3. Aさん、Bさんの語りは、共に4つの時間的区分で語られた(表2)。

各時間区分の内容は「プロ野球選手になるまでの物語(表2のA1, B1を参照)」「プロ野球選手としての物語(A2, B2)」「プロ野球選手をやめる物語(A3, B3)」そして、引退後の「元プロ野球選手としての物語(A4, B4)」だった。

4. 4つの区分(物語)のうち、Aさんは「プロ野球選手になるまでの物語」が最も短かった(Bさんは2番めに短かった)。テキストの文字数(スペースを含む。改行やセクション区切りなどは含まず)で比較すると「プロ野球選手になるまでの物語」:「プロ野球選手としての物語」:「プロ野球選手をやめる物語」:「元プロ野球選手としての物語」の比率が、Aさんは、5056: 579: 2136: 6759であり、Bさんは 2053: 1354: 430: 1734であった。Aさんの語りでは「プロ野球選手としての物語」が最も手短かに語られ、Bさんの場合は「プロ野球選手をやめる物語」が最も手短かに語られている。仮に現役と引退(「プロ野球選手としての物語」と「プロ野球選手をやめる物語」)を合算して比較すると、Aさんは 5056: 2715: 6759、Bさんは 2053: 1784: 1734であり、合算した文字数と比較しても、や

はり、「プロ野球選手になるまでの物語」が、長くかつ克明に語られている傾向がある。一方で、現役時代と引退の経緯については、あまり語られなかったことが分かった。

5. 語られなかったものとして、①現役時代の成績と②職業役割以外の役割の2点が挙げられる。

①現役時代の成績は「元プロ野球選手」を紹介する際、欠かせない事項である。しかし、AさんもBさんも成績については何も語らなかった。さらにBさんの語りでは、実働年数がプロ野球人名事典に記されている年数と違っていたのである。

プロ野球選手を紹介する項目として、プロ野球人名事典(森岡, 2001)には、生年月日、出身、所属球団の変遷、ポジション、経歴(小学校からプロ野球退団までを5~6行で)、成績が記されている。Bさんの場合、「実働7年」で「354試合、572打数147安打、4本塁打、48打点、9盗塁、打率.257」と記載されている。面接では「9年目に引退した」と語られたが、人名事典では、「実働7年」とある。空白の2年間はプロ野球球団に在籍してはいたものの、他者から「実働」とみなされなかったのである。このように経歴や個人の成績が他者に評価され、出版・放送等のメディアにより、広く知られてしまうことは、他職業では考えられないことである。この点でもプロ野球選手は特異な職業であり、こうした背景が彼らの語りに少なからず影響を及ぼしているのである。

②選手役割以外の役割についても、語られなかった。彼らの自己物語は、いずれの時間区分でも、首尾一貫して、職業役割について語られた。唯一例外は、Aさんが大学進学時に語った「息子役割」、Bさんは球団移籍により家族に迷惑をかけると語ったときの「父親役割」だけであった。

6. それぞれの時代区分のなかに、3種類の語りが見られた(図1)。

①語り手が客観的事実と認識している“現実”が語られた。“現実”は、「起きたこと」と「なぜ(そのようなことが結果として)起きたのか」という理由が、対になって語られた。ナラティブ・インタビューでは「始めにhowをきき、その後whyを聞くことが求め

表2 AさんとBさんが語った“現実”の年表

	Aさん	Bさん
プロ野球選手になるまでの物語	<p><b>A1</b></p> <p>小中高と野球で活躍する。</p> <p>↓</p> <p>高3でプロにスカウトされたが、断る。 (Cさんに反対されたから)</p> <p>↓</p> <p>付属高校なのに別の大学に進学する。 (両親が離婚したから)</p> <p>↓</p> <p>大学では、野球不調に。でも一念発起する。 (大切な人が亡くなったから)</p> <p>↓</p> <p>大学4年でプロからスカウトされる。</p> <p>↓</p> <p>テレビのドラフト会議中継で入団を知る。</p>	<p><b>B1</b></p> <p>小中高と野球で活躍する。</p> <p>↓</p> <p>高3でプロにスカウトされたが、断る。 (“おやじ”に反対されたから)</p> <p>↓</p> <p>大学で活躍したのにプロからスカウトされない。 (大学の野球部に不祥事があったから)</p> <p>↓</p> <p>社会人球団で主砲として活躍する。</p> <p>↓</p> <p>3年目にプロからスカウトされる。</p> <p>↓</p> <p>ドラフトで指名されたと他人から聞く。</p>
プロ野球選手としての物語	<p><b>A2</b></p> <p>活躍できない。 (ケガが完治しなかったから) (ピークは高校時代だったから)</p>	<p><b>B2</b></p> <p>活躍できない。 (監督に使ってもらえなかったから) (ピークはプロ入団後3、4、5年目だったから)</p>
プロ野球選手をやめる物語	<p><b>A3</b></p> <p>トレード先で1年後、戦力外通告を受ける。</p> <p>↓</p> <p>とりあえず他球団の練習に参加してみるが、 引退を決意する。 (Cさんに説得されたから)</p>	<p><b>B3</b></p> <p>テスト入団先で活躍しても、 1軍にあげてもらえなかった。 (この球団は「身びいき」だから)</p> <p>↓</p> <p>戦力外通告を受ける。 (裏方として球団に残りたいと願い出たが、 12月まで待たされて、断られた。)</p>
プロ野球選手ではない職業についての物語	<p><b>A4</b></p> <p>父の会社で見習いをする。 「コピーひとつとれない」 「プロ野球選手だったことは隠した」 「プライド捨てた」</p> <p>↓</p> <p>1年後有限会社を作り、 プロ野球選手のテレビ出演マネージメントをする。</p> <p>↓</p> <p>2年後、日本人メジャーリーガーと共に渡米し、 マスコミ対策、財務管理、家族のケアまでする。</p> <p>↓</p> <p>現在、好調。</p>	<p><b>B4</b></p> <p>昔の会社(社会人球団)の子会社を受けたが、 「何もできないキミをとるくらいなら、新人をとるよ」と断られる。</p> <p>↓</p> <p>ようやく卸問屋に就職する。給料1/6になる。 「コピーひとつとれない」 「プロ野球選手だったことは隠した」 「プライド捨てた」</p> <p>↓</p> <p>2年後 営業成績が1位になる。</p> <p>↓</p> <p>3年後 先輩に誘われ転職する。</p> <p>↓</p> <p>現在、不況。</p>

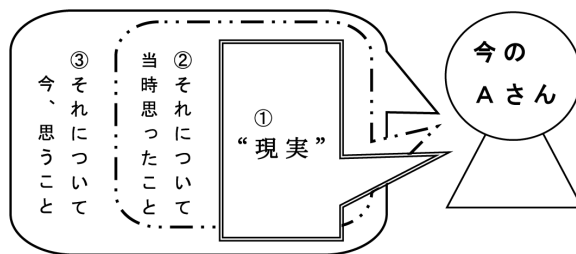


図1 三種類の語り

められる (Flick, 1995/2002)」のだが、尋ねなくても、how と why がセットになって語られていたのだった。しかも、why (なぜそうなったのか) は、「自分の意志ではなく、他者の判断に依拠して決定がなされた」と繰り返し語られた。

②続いて2つめの語りの種類は、「現実」について当時思ったこと」の語りである。“現実”に直面したときの感情、態度などである。

③3つめの語りの種類は「今、(①の過去に起きた“現実”や②の当時の感情、態度に対して)振り返って思うこと」である。この「今、振り返って思うこと」は、常に「もし、それ(①や②)がなければ、よくない結果となったと思う、だからこれでよかった」と、過去を肯定する、もしくは評価する語りであった。

**AさんとBさんの語りの例と考察**

以下、AさんとBさんの語りの例を4つの時間的区分(表2参照)ごとに考察する。

3種類の語り(ナラティブ)は、図1と同様に、以下のように表記を変えて示す。まず、①語られた“現実”は二重線の枠で囲む。他の2種類の語り、すなわち過去の**“現実”**に対し、**②当時どう思ったのかの語り**と**③今、どう思うのかの語り**は、それぞれ点線と実線の枠で囲む。また、Aさんの語りは(A)、Bさんの語りは(B)と記す。聞き手(面接者)の発言

は>印を文頭に記す。

**「プロ野球選手になるまで(年表A1, B1)」の物語の考察: 望んだわけではないが、プロ野球選手になってしまった物語**

「プロ野球選手になるまで」の自己物語は、「望んだ訳ではないが、結果的にプロ野球選手になってしまった」物語であった。これは、そもそも、初めからプロ野球選手役割に執着したことがなかったと強調する物語である。

**①プロ野球選手になるために、必死に努力をしたわけではない。**

まず、AさんもBさんも、特に特別なことをしなくとも、小中高校時代に、群を抜いて優秀な選手であったと語られた。すなわち、幼少期に、プロ野球選手を目指したことはないと言われたのである。

**野球がうまかった“現実”に対して、今思うことの語り(A)**

「プロ野球選手はみんなそうだと思うんだけど、普通にやっτέρことが、すごい能力になってるからー。そこでは、ま、自分では気づかないけど、別に努力してないから、でも人よりうまいよなー。」



②常に他者の決断に依拠した結果、プロ野球選手になってしまった。

人生の分岐点では、常に他者に翻弄されたが、それでよかったと語られた。すなわち、プロ野球球団への入団を見送ったのも、入団を決めたのも、自らの意志ではなかったが、それでよかったのだと肯定する語りが繰り返された。

具体的には、A さんの場合、そもそもプロ野球選手になりたいと自分で努力をしてきたのではなく、「父親に野球をやらされていた」。優秀選手であったため、高校時代にはプロ球団からスカウトされるが、「C さんの反対にあって」高卒時点でのスカウトを断った。大学も「親の離婚を受け、付属高校なのに別の大学に進学した」と、語った。そして、それら過去の“現実”は、今振り返るとすべて、それでよかったのだと肯定された。

一方 B さんも、「父親の反対」で高卒時点でのプロ入りを見送り、大卒時点では大学で不祥事（野球部長が野球特待生の裏口入学絡みで殺害された事件）があったがために、スカウトが来ず、社会人球団に入団したと語られた。そして、それでよかったのだ、と肯定した語りが繰り返された。

社会人になって、当時思っていたことの語り (B)

「社会人に行っても出場停止は 1 年間なので 5 月までは試合に出られなかった……。関係ないようだけど、そういう決まりがあるんだよね。怒り……。どうかな。でも同期がどんどん活躍しているのを見てると悔しかった。6 月からはいきなりレギュラーに抜擢していただいて。もうこのときは、プロは頭になかった。もう子供じゃないですから、22-23 歳ともなれば。大きな会社に入れたし。僕らは野球してたからたまたま入れた会社ですから、当時はね。ま、今は傾いているけど、あの頃は大変なものでしたから。」

③プロ野球選手になった（指名された）ことを他者から聞いた。

ついにプロ野球選手になるが、「テレビでみた (A さん)」、「あとから聞いた (B さん)」と、まるで他人事のようにであったということが語りの中で強調された。

いよいよ指名をうける段階でも、とくにプロ野球選手になることに執着していなかった物語である。

プロ入団をテレビで知った“現実”と、当時思ったことの語り (A)

「で、とんとん拍子でいってドラフト 2 位で〇〇（球団名）ですよ。自分の人生の一大事を就職先をテレビで知る、ってヘンやなー。と思って。ものすごいね、第三者的のように見てました。」

プロ入団をあとから知った“現実” (B)

「たまたまドラフトかけていただけまして、〇〇（球団名）にドラフト 5 位で入りました。同期がパリーグでドラフト 1 位で指名されたんで、胴上げして花束あげて、で、僕の仕事はもう終わったから、歯医者に出かけてたんですね。そしたら電話があって、会社もどつたらどこ行ってたんだ！5 位だって。」

〈「プロ野球選手としての物語 (A2, B2)」の考察：簡潔に語られた物語〉

①現役時代についてと、当時思ったこと

A さんの場合、現役時代についての語りは、他の時間区分と比べ、語られた量が最も少なかった (B さんの場合は 2 番目に短かった。) 3 種類の語りのうち、「現実」と「現実」について当時思ったことのみが語られ、「現実」について、今振り返って思うことは語られなかった。

例えば、A さんの語りは以下で全てである。

“現実”の語り (A)

「ただね、僕はね、キャンプに入る前も、結局僕のピークは高校 2 年だったんですよね。だから怪我をしたあとは完全には怪我治せなかったし。だから 6 年間結局そっからいたけど、一年とおして一軍にいたことはなかったし。一軍で投げたり二軍で投げたりってずっとその繰り返しで。結局終わったって感じだったですね。」

活躍できなかった物語について、当時思っていた

こと語り (A)

「だましだましやりながら、その日その日で調子が変わりながらも、プロに入れたからよかったと思っていましたね。」

“現実”の語り (A)

「でもね、これっていうのはなかったし。やっぱりね、体が覚えていたっていうのもあるけども、アバラを折ったりしたのも、体がへんに覚えちゃったんで、その日によつての調子っていうのはすごいあったね。それは技術のバランスもくずれたし精神的にも、今日ちゃんとほおれるかな、っていうのがありましたから。結局そういうんではプロでは通用はしなかったですね。」

また、Bさんも自分の現役時代のピークについて非常に簡潔に述べている。

活躍できなかった“現実”について、思うこと語り (B)

「今思えば、3, 4, 5年目がピークでしたか、ね。二軍で活躍しても一軍にはあげてもらえず、8年目の終わりに自由契約になりました。32歳です。いい歳ですよ。」

プロ野球からの引退にまつわる物語は、現役中の活躍度によって左右されるようにも思われるのだが、成績についてはほとんど語られなかった。忘れられない試合や、場面などいくつもありそうだが、全く語られなかった。現役時代についての語りは、非常に短く、簡潔に原因 (Aさんの場合は、怪我で。Bさんの場合は監督が替わって) と結果 (戦力外通告) という構造で整理されていた。

なぜ、活躍できなかったのかについて、彼らはそれ以上は語らない。日本のプロ野球選手は、ベースボール (アメリカのメジャーリーグ) とは違う“野球道”を究めることが求められており、言い訳することを良しとしないとする不文律 (“Samurai code of conduct for baseball players”) がある (Whiting, 1977) ため、言い訳をしなかったと考えられる。反論もせず、そのまま他者評価を受け入れなければならないため、現役についての語りの量が、極端に少なかった。

また、現役時代よりも、プロになるまでの物語が長い構造は、「引退後の過酷な喪失体験が、現役時代に活躍できなかったことに起因するのではなく、そもそもプロ野球選手になってしまったことに起因する」印象を形成している。しかも、プロ野球選手になってしまったのは、自ら望んだことではなく、他者にふりまわされた結果であったと語っている。こうした語りは、受け入れがたい現実をより調和的な現実に変える構造といえる。

「プロ野球選手をやめる物語 (A3, B3)」の語りと考察: 意に反した役割離脱を強いられた物語

役割離脱には、自ら徐々に決断を固めていく離脱 (voluntary) と、自らの意志によらない離脱 (involuntary) がある (Ebaugh, 1988)。AさんとBさんの引退は、突如一方的に解雇を告げられた、意に反した役割離脱であった。自らの意志であれば、決断に至るまでの逡巡が、長く語られるであろうが、彼らには、迷う期間すらなかった。プロ野球選手をやめる物語は、手短かに語られた。Aさんの場合は「現役時代の物語」に次いで、2番目に短い物語であり、Bさんの場合は、最も短い物語であった。

①短く語られた、引退直後の進路が白紙だった理由

12月の退団発表記事の、Aさん、Bさんの進路の欄は白紙の状態だった。AさんもBさんも引退直後に次の進路が見出せなかったからだ、短く語った。

次の人生を考えていなかった“現実” (A)

「たぶん自分のなかである程度、次の人生を考えていたらよかったですけど。考える間もなくカットになったから」

“現実”の語り (B)

「もう歳だし。俺には野球しかないし。本当は野球に携わりたかったから〇〇 (8年間在籍した球団名) に直談判したんですよ、10月に。“スカウト”させてくれと。そしたら欠員が出るといわれて、電話をまっていたんですよ。でも待てど暮らせどなくて。2ヶ月待たされて12月にダメだと電話で言

われました。」

野球だけに没頭してきた彼らは「俺には野球しかなかった」と語る。それまで培った技能を評価されて、プロ野球球団のコーチや監督になることができる人はわずかである。ならば高校野球の指導者になりたい、と考えるが、道は容易ではない。日本学生野球憲章第10条<sup>2)</sup>で、元プロ野球関係者による指導や合同練習が原則禁止されているからである。元プロ野球選手が高校野球を指導するためには、高等学校教諭（助手や非常勤講師は除く）として、通算2年以上（97年制度改正以前は通算5年以上。94年以前は通算10年以上必要とされていた）在籍したうえで、適性審査を受けなければならないと定められている。教員免許を取得するためには、引退後に大学に入り、勉強をすることで始めなければならない訳である。2005年2月に日本学生野球協会評議員会は「教員免許を取得していなくても、大学教員として2年以上の在職経験があれば、高校野球を指導できる」と規制緩和を決定したが<sup>3)</sup>、引退後すぐに高校野球の指導者の職に就くことは今なお許されていないのである。突如役割離脱を強いられ、かつ、これまで培った技能を活かせる道が狭く閉ざされていたため、彼らはすぐに次の進路を見出すことができなかつた。

現役時代から辞めたときの準備をしておく必要があることは先行研究の知見からもあきらかである。世界各国でオリンピック選手は、現役中から、The Olympic Job Opportunities Programmeを受講する（Lavalley & Andersen, 2000）。しかし、未だ日本のプロ野球選手の引退後のキャリア支援のシステムは確立されていない。

### ②ほとんど語られなかった不平不満

Aさんは不満を語らず、Bさんから不満がもたらされたのは、以下の語りのみであった。

#### 2つ目の球団の扱いの“現実”について今思うことの語り（B）

「でも腹が立つのは、採用したのに、9年目ずっと〇〇（球団名）の二軍ですごしたんですよ、いくら活躍しても一軍にあげてくれなくて、結局自由契約にされてしまった。やっぱりね、〇〇（球団

名）でね、身びいきなんですよ。ま、こんなこと言っても負け惜しみに聞こえてしまうけど。」

最初の球団にAさんは5年、Bさんは8年いた。ともに別の球団に移るものの、結局1年で解雇されている。この点について量的分析をしたわけではないが、移籍して1年で解雇となり引退するケースは非常に多い。これまで面接調査をした12人中7人が、長くいた球団から別の球団に移籍後、二軍で活躍しても一軍にあげてもらえないまま、1年後に戦力外通告をされていた。長年在籍した球団から、トレードで他球団に放出され、結局1年後に戦力外通告を受ける人は多い。また、Bさんのように、一度は自由契約となり、なんとか別の球団のテストを受けるなどして、必死の努力の末に契約にこぎつけたものの、満足にチャンスを与えられないまま1年で再び解雇を言い渡される人もいる。その結果、引退後の物語では、長く在籍した球団に対しての不満は語られず、最後に1年だけ在籍した球団にのみ不満が向けられる。

長く在籍した球団を「善」、すぐに解雇した球団を「悪」と意味づけることで、“現実”が受け入れやすい物語になる。双方が「悪」では、つらく受け入れがたい。Bさんも、長く在籍した球団に対する不満は語らず、最後に1年間在籍した球団に対してのみ敵意をもらした。長く在籍した球団も、引退後に、Bさんに対し、スカウトとして採用するかもしれないと気をもたせ待たせた上に、結局採用しなかったのだが、Bさんは、淡々と事実だけを述べ、怨恨は語らなかつた。

### ③辞めるときも他者判断に依拠していた。

Aさんは最後はCさんのアドバイスを受け、引退を決意したと語った。

#### Cさんに引退を諭された“現実”

「6年やってどうだった？ 厳しいと思います。厳しいですね。ほんなら、いま28でこれからスーパースターになれると思うか？ って言われて。可能性0じゃないけど、非常に厳しいと思いますって言って。だったら一日も早く辞めろ。」「えーって言った最初。いま〇〇（球団名）でね、俺の力で2-3年取るとは可能だと思うけど、それはその後のお前の人生にとってためにならん。それやった

ら、1年でも早く、いちにちでも早よ辞めてってあの人おもしろいこと言ったんですよ。コンピューター学校に行け。いま考えたらなるほどとも思うんだけどー、その当時にね、Cさんにね、おまえやめてコンピューター学校に行けて俺いわれたの。今ならわかるけど、そんなときは、おおいおおい、おっさん何いうねん、自分の人生やないからって無茶言うなと思った。やめろっていうだけではなく、その次のことまで言われたから、逆にね、トーンとこっちやったかもしれない。コンピューター学校行きなさいっていわれたの。はあーって俺言って。で、野球はとにかく今すぐ辞めろと。で、なんて言われたかな……野球辞めて、ちゃんとした生活をしろ。ちゃんとした仕事をしなさい。このスポーツ業界には戻ってくるな。といわれたんですよ。要はこういう世界で、野球界で、まさに、今ならわかるんですけど。よう、こんな不安定な世界に、もう居てるなって言われたんですよ。結婚したいんだったら尚更やって」

Cさんは、他の選手たちの面接調査でもよく登場する球界の有力者である。そのCさんとAさんの祖父が「仲良し」だという縁で、Aさんが、高校時代にプロからの誘いがあったときにも、父親はぜひとも入団するよう希望したのだが、Cさんが「大学を出てからでも遅くない」と反対したことで見送られた経緯もあった(表2のA1参照)。

#### 〈「元プロ野球選手の話(A4, B4)」の語りと考察：再就職に伴う苦労の物語〉

##### ①これまでのキャリアは評価されなかった。

Bさんは、スカウトとしてプロ野球球団に採用してもらえなかったため、社会人球団時代の監督に相談したところ、(球団が属する会社の)子会社を紹介してくれた。一度入った会社の子会社を受けたことになる。すると、「会社として仕事をなにもやったことない33歳で何も知らない人間を採るくらいなら、新卒の人間を採用するよ」と言われた。

##### 子会社での“現実”について、当時思ったことの語り(B)

「一番ショックだったし、悔しかった……なにも言い返せなかった。あたま殴られたようなショ

ックでした。……今なら言い返せる……。でも、たしかにあのときはそのとおりだったから。ショックでその後のことあまり覚えていないです。……見返してやるというものもあるけど……どうしようという不安の方が強かったです。プロをやっていて30歳くらいから、辞めたときのこと頭をよぎったりしていたです。10代の子と同じことしてるとシンドイから、辞めるときが近いな、とか思うんだけど……あえて考えないようにしてたですね。」

##### ②元プロ野球選手だったことがわかると馬鹿にされる。

「元プロ野球選手であることが知れると、馬鹿にされる」と、AさんもBさんも繰り返し語った。自らも、引退したプロ野球選手を「何も知らない、何もできない」と評価していた。何も知らないことのメタファーとして奇しくも、2人とも「コピーひとつとれない」と語った。他にも「勉強との両立できなかった(Aさん)」「俺とちがって親父はインテリなんですわ(Bさん)」など、野球だけをしてきたため勉強をしてこなかったと随所で語られ、プロ野球選手であることを隠していたと語った。

##### 元プロであることを隠していた“現実”の語り(A)

「俺ね、プロ野球選手だったってことを一切ひとに言わなかったですよ。言わずにやってきました。恥ずかしかったんですよ。あのね、自分の中に……プロ野球選手ってあくまでグラウンドの中だけのことじゃないですか。でも社会人になった時に……。ユニフォーム着てる時にはいろんな社長さんたちにもちやほやされるじゃないですか。でもユニフォーム脱いで、その人らと同じ土俵にってことになるとユニフォームは関係ないでしょ。逆に日本のこの流れからみると、野球馬鹿っていうのがあるじゃないですか。自分も中学から野球をやって勉強きらいじゃなかったけど、ぜったいおろそかになるじゃないですか。両立はぜったい無理だから。だから世の中の見方が野球選手ってユニフォーム脱いだらなんもでけへんやろっていうのがあるから。今でもありますよね。だからそれにすごいコンプレックスがありましたから。野球やめたら、『やってた、野球やってた』っていうと、すごいなめられるって思ってたから、だか

ら野球やってたっていうこと隠してた。だから人と話さなかった。ほとんど。

#### 元プロであることを隠していた“現実”の語り (B)

「よし、がんばったろうと気合ははいってても、コピーのとり方ひとつ分からないし、33歳ですけど、ごっつう若い子に教えてもらわなくてはいけなくて。それは歯がゆさもあるけど、そのときは頭下げて教えてもらってました。プライドをすてなければ、間違えたとか実際文句言われたりしても、あやまらなきやいけなしい。でも営業は成績残してなんぼだから。こいつは野球しかできないと馬鹿にされても、とにかく成績残せばいいんだから。野球やってたときの話をすれば、営業に役立つとかみんな思ってますけど、それは大きな間違いで。話の種にはなっても、契約にはつながらないから。だから野球やってたというのは一切言いませんでした。知ってる人にはま、うそを付くことはないけど、でも知らない人には自分からは言わなかったです。」

#### ③引退したプロ野球選手の特性

「プロ野球選手」は「他の業界の人」たちとは違う、と繰り返し語られた。

#### 「エリートだった」“現実”に対して今思うことの語り (A)

「だって小学校のときから、なんかエリートエリートといわれ、挫折もなく。で、入社試験もなく、プロ野球選手になったわけだから。挫折感がないわけですよ。ま、怪我することはあっても、最終的にプロ入ったということは順調にいった、ってことでしょ、大きくみると。そこではじめて野球がなくなったときの自分が何もできないのわかっているから、怖いんですよ、すごく。だからそこで虚勢はるんですよ、みんな。」

#### 「無知」「金」「人がよってくる」「現実」について今思うことの語り (A)

「ちょうどすごい脱税事件とかあったでしょ。」

>はい。先輩の紹介で税理士さんをみんな頼んでみんな脱税をさせられていた、という……

「そうそう。野球選手っていうのは金がつくんですよ。でもその金がなかったらなんもない、野球選手は自分が無知だと知っているから、ほかの世界のひとを入れたくないものなんです。いれちゃうと自分を、すごいそういう目で……。子供のころからの習性だとおもうけど、野球選手の。要は人がよってくるんですよ。野球がうまいから、契約金が入ったから、ってことで人がよってくるのね。そういうことに対してみんな興奮しちゃうんですよ。でも選手を辞めてしまうとただの子供なんです。だから簡単にだまされるし、自分の意見ももってないし。だからそういう事件が起きたと思うんですよ」

#### ④プライドをすてなければならない。

「プライド」を持っていることはよくない、と語られた。具体的には、「プライドをすてる」とは、「頭下げて、年下に、基本から、教えてもらう」ことだと A さんも B さんも語った。彼らの語りから、年功序列は非常に重要であり、「年下よりも能力がない」とみなされることで、大きく「プライド」を傷つけることが分かった。ただ単に学年が上だということで絶対的な権力をもつのが、野球界の規範である。B さんは、プロ野球球団に入団して一年目の語りの中でも、年下に負けることにこだわりをみせている。

#### 年下より打てない“現実” (B)

「同期とはいっても年下ばかりでしょ、高卒とか。大卒より年上で打てなくて、八方塞りな感じだった。いろんなこと経験してきて、それなのに。」

現役時代と変わらず、彼らは、引退した後も野球界の規範を持ち続け、年功序列を重んじていたのである。

ところで、A さんは活躍できなかった選手ほどプライドをすてるのが難しいと、以下のように語った。

#### プライドをすてようとした“現実”について、今思うことの語り (A)

「その、みんなプライドプライドっていうじゃないですか。でもぼくはそこをはずすことがプライ

ドだと思いますね。こんなもんはずさなければでけへんと思ったから、そういうところから、ですよね。」

> (うなずき)

「結局ね、中途半端な選手に限ってははずせないひとが多いね。おれらみたいな感じで。だって中途半端やから、『俺プロ野球選手だったんだぜ』と言わなければならないわけじゃないですか？ 名前が売れて顔が売れてれば言わなくてもいいわけでしょみんな。だからぼくらみたいな、みたことあんな、ぐらいのレベルだと、なんやろね、言わなければ認めてもらわれへん、というのがありつつ、でも僕の場合は言っちゃったら、ばかにされるっというのもあったから。」

プロ野球選手の引退には、有名性ゆえの苦悩がある。特にスター選手は、引退により、注目されなくなるという喪失体験、すなわち有名性からの離脱を強いられる点で困難を伴うとの指摘もある (Drahota & Eitzen, 1998)。

しかし、A さんの語りからは、引退後、プロ野球選手であったことが認識されていなかった (有名性に欠けていた) と知ることで、「プライド」が傷つけられたことがわかる。プロ野球選手としての知名度が高くない「中途半端な選手だった」と、気づかされた選手ほど、「自分は元は野球界の頂点にまで上り詰めたプロ野球選手であった」という自負、つまり「プライド」が頭をもたげてしまうと語っている。

A さんは「そんなもん」を「はずさなければ」、先に進めない。そういうところから、セカンドキャリアは始まる、と語った。まさに、プロ野球選手であったことに執着しないために「プライドをすてることがプライドである」という新しい価値基準に基づく物語を生み出したのである。

### ⑤現在の仕事の苦勞

B さんは、現在の職業の苦勞について語った。A さんも、現在の職業について語ったが、「第三者に迷惑がかかるといけないから」録音の中断を求めた。そのため、A さんの現在の職業についての語りは本稿でデータとして採用しなかった。

### “現実” (今の仕事) についての語り (B)

「今の仕事はエンドユーザーでできる仕事しかないですね。個人の家のリフォームやったり。問題はエンドユーザーがどこにいるかわからないってことで。新しいお客さんを得るために一日家を 100軒くらいまわっていくんだけど、汚いものみるような目で見られますよ。そりゃそうですね、押し売りみたいに思われても仕方ないですよ。現場も行きますよ。外は寒いですよ。……想像できないでしょう。」

### ⑥プロ野球中継を観ることができなかった。

### プロ野球中継をみることが出来なかった“現実”について、今思うことの語り (B)

「辞めて 2 年間は野球は観なかったです。どこかでねたましかつたのかもしれないですね。……でも 4 年くらい経ったときに観にいけるようになりました。もとの仲間にサラリーマン姿を見せられるようになりましたね。ほんと、いままでやってきたことを否定しても仕方がない、と言えるようになったのは、3 年かかったってことです。」

これは、プロ野球選手役割に執着せず、役割離脱を受け入れた証として語られた物語である。「ねたましい」と思ううちは「野球を見ることすらできない」。しかし「今までやってきたことを否定しても仕方がない」と言えるようになり「サラリーマン姿をユニフォーム姿の元の同僚たち、後輩たちにみせることができるようになった」ので、もうプロ野球選手役割には執着していないのだと、現在の B さんは意味づけていることが分かる。

一方、A さんは「自分は元プロ野球選手だ」と言えるようになったことが、役割離脱をした証であると語る。

### 元プロ野球選手だと言えなかった“現実”について今思うことの語り (A)

「野球やってたんですよっていうのも、こういうベースができてちょっと経ってからじゃないと言えなかったな。」

A さんも、B さんも、今はもうプロ野球選手役割に執着していないと強調したのである。

### まとめ

プロ野球選手は、取材という名目で、自己物語を語るよう求められる職業である。それは入団前から始まるのである。しかし、その物語は変容する。以下の記事は入団直後、開幕前の春キャンプでの B さんのインタビュー記事である。

「見ての通りゴツイイメージですから、ハデさよりも“職人芸”で名を売るそんなプレーヤーが自分の理想です」

(X 誌<sup>4)</sup> 1988 年 2 月より抜粋)

この約 5 年後、本論文の面接調査においては、B さんは当時のことを以下のように語っている。

キャンプの“現実”について、今思うことの語り (B) 朝から晩まで毎日野球をしているのが、もう嫌気がさしてきました。即戦力という触れ込みだったのに、キャンプで、やはり……打てなくて。ピッチャーの球も違うし、バットも違う。金属バットで勘違いしてたんでしょね。その頭で打ちにいかけてもだめで……。同期とはいっても年下ばかりでしょ、高卒とか。……大卒より年上で打てなくて、八方塞がりな感じだった……。いろんなこと、経験してきて、それなのに……実力が全然違う。自分がそこに到達していないのがよくわかった。入って失敗したよ、って思ったこともあった。でも……あとから、あの時、行っとけばよかったと思うよりは……行っておいたほうが、いい、と思う、し……。

自己物語は幾通りにも語るができる。語られる内容と、語られない内容は、そのつど変わっていくものである。彼らも、幾度も自己物語を語り直し、その語りは変容していったはずである。語りは、語られる

場や相互作用によっても変容する。プロ野球選手の場合、数々の語りが出版物や放送により報道されており、その記録を比較することで、過去の語りがどのように変容したのかをみるができるのである。

また、本人が“現実”として語ったことと、取材記者の視点による“事実”とを、比較することも可能である。B さんは長年在籍した球団を自由契約になったあと、別の球団のテストを受けに行き移籍した。この点については、面接調査で B さんも語っているのであるが、語られなかったエピソードが、雑誌に記事として載っていた。

世の中は皮肉に出来ている。○月○日、羽田空港での出来事だった。○球団を今限りで自由契約になった B は空港ロビーで思わず息をのんだ。つい先日までチームメートだった○球団の選手たちが目の前にいるではないか。

彼らは秋季キャンプ地の○○へ飛び立とうとしている。B は××球団の入団テストを受けるため××へ向かおうとしている。希望に燃える集団と明日を探す男。運命のいたずらにせよ、とんだ鉢合わせだった。

(Y 誌<sup>5)</sup> 1995 年 11 月より抜粋)

B さんは、面接調査でこの劇的なエピソードについて、全く語らなかった。「本来なら、自分もそのメンバーの一員としているはずであったのに、辛かった」物語は、執着する物語だからである。

自己物語は、単に誰か、もしくは自分自身に、自身の人生を語るのではなく、アイデンティティを適合させるための手段である (Rosenwald & Ochberg, 1992)。B さんにとって、このエピソードは、引退後 6 年目を迎え、プロ野球選手役割への執着を打ち消そうとする自己とは適合しなかったから語られなかったと考えられる。本人が単に忘れて語らなかった可能性もあるが、しかし、記事にもあるように、大変皮肉で「運命のいたずら」ともいえる、劇的なエピソードである。プロ野球選手 (あるいは元プロ野球選手) としての B さんについて書かれた雑誌記事を蒐集したところ、その数は 1 桁であった。そのうちのひとつが、この記事である。「運命のいたずら」を経験し、さらに後日、もう一度記事として読んだ (経験した) 可能

性は高く、面接の際に、忘れていたとは考えづらい。  
「クビになったばかりのあのときあの空港で、元チームメイトに偶然出会ってよかったと今では思う」などと肯定することができていれば語ることもできただろうが、それが(まだ)出来なかったため語られなかったと考えられる。

この「運命のいたずら」については全く語らなかったが、他の引退後のつらい経験については、「元プロ野球選手をやめる物語 (A4, B4)」で、いくつかの「辛かった“現実”」が語られている。「これまでのキャリアが周囲に評価されない」「プロ野球選手だったことを隠さなければ馬鹿にされる」「俺ら」と「一般人」との間にある深い溝(プロ野球選手ならではの特性)等、具体的にエピソードは語られている。ただし、それら過去の「辛かった“現実”」が語られるときは、併せて「(過去の“現実”や“思ったこと”に対して)今振り返って思うこと」が、以下のように語られていた。こうした語りにより、「辛かった“現実”」は、終わったこととして時間的な距離が置かれることとなり、また、当時抱いた感情(怒り、プライド、ねたみ、恐怖心)も、すでに過去のもので今はそうは思っていない印象を形成していた。

2つ目の球団の扱いの“現実”について今思うことの語り (B)

「でも腹が立つのは、……(中略)……やっぱりね、〇〇(球団名)てね、身びいきなんですよ。  
ま、こんなこと言っても負け惜しみに聞こえてしまうけど。」

プライドをすてようとした“現実”について、今思うことの語り (A)

「その、みんなプライドプライドっていうじゃないですか。でもぼくはそこをはずすことがプライドだと思えますね。こんなもんはずさなければでけへんと思ったから、そういうところから、ですよね。」

プロ野球中継をみるのが出来なかった“現実”について、今思うことの語り (B)

「辞めて2年間は野球は観なかったです。どこかでねたましかったのかもしれないですね。……で

も4年くらい経ったときに観にいけるようになりました。もとの仲間にサラリーマン姿を見せられるようになりましたね。ほんと、いままでやってきたことを否定しても仕方がない、と言えるようになったのは、3年かかったってことです。」

元プロ野球選手だと言えなかった“現実”について、今思うことの語り (A)

「野球やってたんですよっていうのも、こういうペースができてちょっと経ってからじゃないと言えなかったな。」

Aさん、Bさんの引退は、単なる役割離脱ではなく、意に反した離脱であり、役割を剥奪される経験であった。彼らの語った物語からは、引退を「単なるライフコースにおけるイベント(役割移行)のひとつ」として片付けるライフコース論(Greendorfer & Blinde, 1985)で論じることは出来ないことは明らかである。

Aさん、Bさんは自分で時期を決めることも出来ず、引退後の準備も出来ないまま、突如これまでの帰属集団(社会)から放り出された。新しく放り込まれた社会は、これまで一線を画してきた“俺ら”とは違う“一般人”の社会であり、これまでと社会規範も違い、“俺ら”のこれまでのキャリアは評価されない。この状態は死生学でいうところの“社会的死”である。また老人学における“役割喪失による不適応”といえなくもない。しかし、彼らがまだ若く、最終的な職業役割からの離脱でない点で、やはり死生学、老人学では論じることはできない。中年期にある彼らが“物理的死”を迎えるまでの時間は、より長く残されていると考えられる。経済的な側面からみても、生きるためには、どうしても“社会的死”の状態から抜け出し再生しなければならぬ、追い詰められた事情がある。

Aさん、Bさんにとって意に反した役割離脱は辛い体験であった。元役割(プロ野球選手役割)に対する執着(role residual)は強いはずである。従って延々と執着の物語が語られると思われたが、しかし、彼らの自己物語では、逆に執着がないことを強調する語りが繰り返された。これは、どうしても再生しなければならぬ彼らが、自分自身を納得させるために、自己物語を書き直した結果なのではないかと考えられる。

プロ野球選手役割を剥奪された直後は、Aさんは現



役を続ける方法を模索し、Bさんは球団内での職を得ようとするなど、二人ともプロ野球界から離れまいと奔走した。プロ野球選手役割に「執着」していたのである。例えば、その当時に語られた自己物語は、今とは違っていたはずである。恐らくは、「過去の現実について、今振り返ってみるとどう思うか」の語りでは、後悔、あるいは他者に対する不満のひとつも語られたと思われる。

しかし、引退から5年の歳月を経た今回の面接時には、2人の元プロ野球選手は揃って「過去の選択はいずれも正しかった」と肯定する語りを繰り返した。他に幾通りにも語れるはずの物語が、「執着を断ち切るための構造」で語られたのである。

「ようやく周囲に元プロ野球選手だったと打ち明けた」、「元の球団の仲間と会いに行けるようになった」というAさんとBさん。彼らは「プロ野球選手になるまでの物語」を克明に語り、「現役時代の物語」はあまり語らなかつた。このように、現役時代よりもプロ野球選手になるまでの物語が長い物語構造は、「引退という過酷な結果は、現役時代に起因するのではなく、そもそもプロになってしまったことに起因する」印象を形成する。しかもそのプロ野球選手になってしまったのは、「他者によって決められた結果だ」と語られた。これも、「プロ野球選手役割への執着がない」ことを印象付ける語りとなっている。新しい役割を受け入れ、先に進むために、引退から5年が経過した元プロ野球選手は過去の役割に執着しないことを強調する構造で、自己物語を語ったのであった。

## 注

- 1) 挑戦はしたものの、結果的には入団できなかったことが確認できている(篠田, 2004)。
- 2) 「日本学生野球憲章第10条」
  1. 選手及び部員は、職業野球に所属する選手、監督、コーチ、審判員その他直接に職業野球の試合若しくは練習に関与している者又は関与したことがある者と試合若しくは練習を行い、又はこれらの者からコーチ若しくは審判を受けることができない。但し、直接に職業野球の試合又は練習に関与したことがある者であっても、日本学生野球協会審査室におい

てその適正を認定された者については、この限りではない。

2. 前項の規定は、職業野球のスカウトその他これに準ずる者についても、これを準用する。
- 3) 2005年2月25日日本学生野球協会評議員会決定により、「日本学生野球憲章第10条」について以下の規制緩和がなされた(週刊ベースボール, No.11(3月21日号), 96-97より抜粋)。
  - ①元プロ関係者のアマチュア(学生野球)指導資格全般に関する規制緩和
  - ②元プロ関係者による大学野球部監督・コーチ就任のための資格に関する規制緩和
  - ③高卒の元プロ関係者が大学特別コーチをする場合の規制緩和
  - ④高野連主催の技術指導講習会、研修会での元プロ関係者の指導に関する規制緩和
  - ⑤現役プロ選手が母校である高校で行う自主トレに関する規制緩和
- 4) 接対象者を特定できないよう雑誌名をX, Yと表記した。
- 5) 面接対象者を特定できないよう雑誌名をX, Yと表記した。

## 引用文献

- Bruner, J. (1987). Life as Narrative. *Social Research*, 54, 11-32.
- Curtis, J., & Ennis, R. (1988). Negative consequences of leaving competitive sport? Comparative findings for former elite-level hockey players. *Sociology of Sport Journal*, 5, 87-106.
- Drahota, J.A.T., & Eitzen D.S. (1998). The Role Exit of Professional Athletes. *Sociology of Sport Journal*, 15, 263-278.
- Ebaugh, H.R.F. (1988). *Becoming an EX: The process of role exit*. Chicago: The university of Chicago.
- Flick, U. (2002). 質的研究入門：〈人間の科学〉のための方法論(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京：春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- George, L.K. (1993). Sociological perspectives on life transitions. *Annual Review of Sociology*, 19, 353-373.
- Greendorfer, S.L., & Blinde, E.M. (1985). Retirement from inter collegiate sport: Theoretical and empirical considerations. *Sociology of Sport Journal*, 2, 101-110.
- Harris, D.S., & Eitzen, D.S. (1978). The consequences of failure in sport. *Urban life*, 7(2), 177-188.

- Kearl, M.C. (1986). Knowing how to quit: on the finitudes of everyday life. *Sociological Inquiry*, 56, 283-303.
- Lavallee, D., Sinclair, D.A., & Wylleman, P. (1998). An annotated biography on career transitions in sport: 1. Counselling based references. *Australian Journal of Career Development*, 7(2), 34-42.
- Lavallee, D., & Andersen, M.B. (2000). Leaving sport: Easing career transitions. In Andersen, M.B. (Eds.) *Doing sport psychology*. (pp. 249-260). Champaign, IL: Human Kinetics Publishers.
- Linton, R. (1936). *The study of man: An introduction*. New York: D. Appleton-Century Co.
- Murphy, S.M. (1995). Transitions in competitive sport: Maximizing Individual potential. In Murphy, S.M. (Eds.) *Sport Psychology Intervention*. (pp.331-346). Champaign, IL: Human Kinetics Publishers.
- 森岡浩 (編). (2001). プロ野球人名事典. 東京: 日外アソシエーツ.
- 野口裕二. (2002). 物語としてのケア: ナラティブ・アプローチの世界へ. 東京: 医学書院.
- 野口裕二. (2003). 臨床研究におけるナラティブ・アプローチ. 看護研究, 36 (5), 413-422.
- Ogilvie, B., & Taylor, J. (1993). Career termination issues among elite athletes. In Singer, R.N., Murphy, M., & Tennant, L.K. (Eds.) *Handbook of research on sport psychology*. (pp.761-775). New York: Macmillan.
- Riessman, C.K. (1993). *Narrative Analysis*. Newbury Park, Calif.: Sage Publications.
- Rosenberg, E. (1984). Athletic retirement as social death: Concepts and perspectives. In Theberge, N., & Donnelly, P. (Eds.) *Sport and sociological imagination: refereed proceedings of the 3rd Annual Conference of the North American Society for the Sociology of Sport*. (pp.245-258). Fort Worth: Texas Christian University Press.
- Rosenwald, G.C., & Ochberg, R.L. (1992). *Storied lives: The cultural politics of self-understanding*. Boston: Yale University. Press.
- 篠田潤子. (2004). プロ野球選手の引退後の進路を分かちつものは何か (1): 監督・コーチへの登用をもたらす変数の決定. 慶応義塾大学院社会学研究科紀要, 56, 89-97.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1999). 質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリーの技法と手法 (南裕子, 監訳. 操華子・森岡崇・志自岐康子・竹崎久美子, 訳). 東京: 医学書院. (Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*. Newbury Park, Calif.: Sage Publications.)
- Swain, D.A. (1991). Withdrawal from sport and Scholssberg's model of transitions. *Sociology of sport journal*, 8, 152-160.
- Whiting, R. (1977). *The Chrysanthemum and the Bat*. New York: Dodd, Mead & Co.
- 山本登志哉. (2004). 3-1 フィールドへの入り方. 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編), 質的心理学: 創造的に活用するコツ (pp.66-71). 東京: 新曜社.

(2004.5.30 受稿, 2005.10.16 受理)